

アペックスグループ

# Sustainability Report 2015

サステナビリティレポート2015



社名	株式会社アベックス
本社	〒474-0053 愛知県大府市柘山町2丁目418番地
設立	昭和38年(1963年)2月
資本金	8,400万円
売上高	610億円(平成26年度実績)
社員数	1,650名
営業拠点	全国主要都市99ヶ所*(平成26年12月末) ※株式会社アベックス西日本を含みます。
事業内容	自動販売機オペレーター業

全国に拠点をもち、独立系専門オペレーターとして、カップ式自動販売機を約50,500台、缶・PETボトル・紙パック飲料自動販売機を約24,000台、その他自動販売機を約2,000台展開しています。従業員様用としてオフィスや工場で、施設のご利用者様用として駅・高速道路SA・PA等で、生徒様や学生様用として学校で、さまざまな方々の憩いにお役立ていただいています。



フード事業

「スペチャリータ・ディ・カルネ・キッチャーノ」

ビステッカ(イタリア式炭火焼ステーキ)をはじめイタリアン・スタイルの肉料理に特化した、“メニューのない店”。他にはない個性的なダイニングです。素材は、こだわりの産地から厳選した“個性的な肉”を取り揃え、ドライエイジングで的確に熟成させたものを使用しています。



フレンチレストラン「アピシウス」

1983年4月に有楽町・蚕糸会館にて創業し、おかげさまで本年で開業33年目を迎えました。

“真実の正統派フランス料理”をご提供するため、そして、お客様に無二の感動を贈るために、その味を磨き続けています。美術館のように名画に囲まれた空間の中で、旬の食材で調理したお料理の数々を食べながら、ゆっくりとした上質なひとときをお過ごしください。

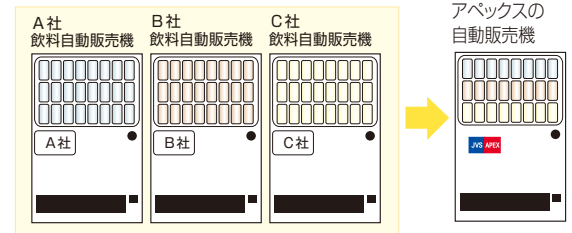


アベックスは専門オペレーターです。

“自動販売機オペレーター”とは、自動販売機を保有してさまざまな場所に設置することによって、中身商品やサービスを販売・提供する業態のこと。オペレーターには、これらの業務を専門的に行う「専門オペレーター」と、飲料メーカーなどがオペレートも兼ねて行う「兼業オペレーター」があり、アベックスは「専門オペレーター」にあたります。

アベックスは専門オペレーターのため、品揃えが特定メーカーに偏ることがありません。このため、売れ筋商品を1台に取り揃えたり、カップ機を併設することもできますので、複数の自動販売機の台数を集約することが可能で、消費電力量とともに総合的なCO<sub>2</sub>排出量の削減を目指します。

缶・PETボトル飲料自動販売機の場合



## 編集方針

アペックスでは、経営理念である「環境保全活動に最善を尽くし、地球環境との調和を図る」の実現に向けたグループの活動と今後の方向性を、幅広くステークホルダーの皆様にお伝えするために、環境保全活動に関する情報を積極的に開示しております。

弊社の環境保全への取り組み・社会とのかかわりを、本報告書を通して、一人でも多くのステークホルダーの皆様にご一読いただき、ご意見を頂戴し、今後の改革につながるきっかけにしたいと考えております。ぜひ、忌憚のないご意見、ご感想をお寄せくださいますようお願いいたします。

## 報告対象範囲

### 株式会社アペックス

※グループ会社である株式会社アペックス西日本、日本ベンダー整備株式会社、株式会社名古屋フーズの取り組みも一部含まれます。  
※ただし、「アピシウス」(フレンチレストラン)、「キッチンノ」(イタリアンレストラン)における取り組みは含みません。

## 報告対象期間

実績 2014年度(2014年4月1日～2015年3月31日)

※一部、直近のデータを含みます。

## 発行日

2015年7月

## 次回発行日

2016年7月発行予定

## 本報告書に関するご連絡先

株式会社アペックス 環境部

〒102-0074

東京都千代田区九段南2丁目3番14号 靖國九段南ビル6F

電話: 03-3234-6421 FAX: 03-3239-5805

レポート内容は弊社ホームページでもご覧いただけます。

<http://www.apex-co.co.jp>

## 目次

● 会社概要	1
● 経営理念	3
● 環境方針	3
● 環境保全活動の柱	3
● ごあいさつ	4

## 特集①

● 間伐材の活用 ～生物資源・地球温暖化緩和への取り組み～	5
----------------------------------	---

## 特集②

● 持続可能な調達 ～生物多様性保全への取り組み～	7
------------------------------	---

## 特集③

● アペックスの自動販売機開発	9
-----------------	---

## 環境への取り組み

● 事業活動における環境影響	11
● 持続可能な社会を目指して	13
● 環境マネジメント活動	19

## 社会とのかかわり

● CSR活動・地域コミュニケーション活動	21
● 環境保全活動の歩み	22



アペックスは「Fun to Shareキャンペーン」に参加しています。

常に改善・改革を繰り返し、最高の商品とサービスを提供する  
正当な利益を創り、働く仲間の成長と社会への責任を果たす  
環境保全活動に最善を尽くし、地球環境との調和を図る

(2011年3月1日改訂)

### 基本理念

アペックスグループは、地球環境の保全が世界共通の課題であることを認識し、経営の最重要課題の一つに「地球環境との調和」を掲げ、自らの責任として、環境保全活動に最善を尽くします。

### 基本方針

アペックスグループは、自動販売機オペレーター業界の一員として、持続可能な低炭素社会を築くために豊かな自然との共存を目指します。

1. 事業活動、製品及びサービスが環境に与える側面を的確に捉え、環境マネジメントシステムを継続的に改善し、汚染の予防に努めます。
2. 環境側面に関係して適用可能な法的要求事項及びその他の受入れを決めた要求事項を順守するとともに、国、自治体等の施策に積極的に協力します。
3. 循環型社会の実現と省資源に向けて、事業活動のあらゆる側面で原材料・エネルギーなどの4R(リデュース、リユース、リサイクル、リカバー)を、適正且つ積極的に推進します。
4. 業務の改善に取り組み、総合的な環境保全活動に努めます。
5. 周辺地域の環境美化等に積極的に取り組み、地域社会に貢献します。
6. 環境方針は一般に開示します。

## アペックスが推進する4つの「R」

### 4Rの推進を環境方針でコミットメント

アペックスでは、1996年に環境部を設部して以来、一般的な「3R」(「Reduce-発生物を抑制する、削減する-」・「Reuse-再利用する-」・「Recycle-再生する-」)に、「Recover-エネルギーで再利用する-」を加えた「4R」を、環境保全活動の中核として活動しています。4つめの「R(Recover)」とは、アペックスの取り組みの特長の1つで、自動販売機から排出される可燃廃棄物をRPFという固形燃料にし、エネルギーとして再利用するという活動(詳細は、13～15頁・17頁をご参照ください)です。

アペックスでは、「4R」を活動の柱としながら、今後も、持続可能な循環型社会、低炭素社会構築に努めてまいります。



ごあいさつ

アペックスがこだわるのは  
あくなき品質の追求。  
環境活動にも品質を求め  
お客様との価値の共有化を  
大切にまいります。



株式会社アペックス  
代表取締役社長

奥 吉平

アペックスは、飲料自動販売機の設置・運営を本業としており、当社の飲料を通して、喉の渇きを癒すことから、憩いのひととき、最高のひとときを提供することを使命としております。この「最高のひととき」において、「品質の追求」は欠かせません。口に入れるものである以上、それは当然のことです。「安全・安心」を当たり前にするための「アペックス品質」の追求です。食品への異物混入が後を絶たない昨今、「当たり前」の事を当たり前にする“当たり前のことを当たり前前にできる”ということは企業の存続に関わる一大事であると考えております。

そして、私たちが欠かせないとする、もう1つの“品質の追求”が環境への配慮にあると考えています。飲み物という食品に携わる業を営むということは、自然の恵みの上に成り立っている企業であり、その自覚を忘れてはなりません。

当社の創業当時の基幹であるカップ式自動販売機は、地元の水道水を使用している点において、環境負荷の小さい、すなわち環境優位性の高い飲料自動販売機であると評されています。そのおいしい水道水は、健全に育まれた森林資源の恩恵を受けているものであり、また、紙カップの原料である「紙」もまた、紛れもない森林資源そのものです。まさに「水」と「紙」は、飲料と容器という、私たちの業の大本です。そこで、「カップ原紙」を見直し、間伐材を含む国産材100%の原紙を使用し、付加価値のついた容器にこだわることで、微力ながら日本の人工林を健全にする一歩になることができると考えました。こうして、日

本自動販売機オペレーター業界初の間伐材紙カップが誕生しました。当社の取り扱う紙カップの約半分の切り替えは完了しましたので、今年度は、可能な範囲での全数を間伐材紙カップに切り替える予定です。

また、日本の森林を健全に育むことは、地球温暖化の緩和にも貢献できるものと考えております。異常気象はもはや恒常化しつつあり、これら気候変動には、地球温暖化の影響が一因であると考えられています。「景気が回復したら・・・」という声も耳にしますが、環境への取り組みはそれでは間に合いません。ハイエイトス※が終わる数年後には、気温上昇が一気に進むと言われています。待たなしの状況下、企業活動においても、より高度な環境経営の推進が求められております。

アペックスでは、引き続き、本業に根差した環境活動に取り組み、安全・安心で快適な生活環境を創造してまいります。

本報告書では、アペックスが目指している方向性や力を入れている取り組みを中心に、昨年度1年間の取り組みを報告しています。今後もステークホルダーの皆様のご期待やご要望を踏まえ、持続可能な低炭素社会の構築に貢献できるよう努めてまいりますので、率直なご意見、ご評価とともに、一層のご指導、ご支援を賜りますようお願い申し上げます。

2015年7月吉日

※ハイエイトス

全球平均地表気温の上昇率が横ばい、あるいは負になるような状態を指します。「中断」を意味するこの用語は、米国のG. Meehl博士のグループが最初に用いたもので、現在では地球温暖化の停滞状態を指すものとして広く使われています。





# 特集①

間伐材の活用～生物資源・地球温暖化緩和への取り組み～

身近な紙カップで、ひと・森林をつなぐ。

紙カップは、アベックスのお飲み物とお客様をつなぐ、大切な役割を果たします。こだわりの一杯を大切に注ぐ容器であり、私たちの思いをお伝えする手段でもあります。創業以来、カップ式自動販売機にこだわり続けるアベックスは、機械やお飲み物のみならず、容器である紙カップにもこだわってまいりました。自分たちの遠くにあるものに着手するよりも、まずは足元から—という考えの下、大切な容器のできる環境保全を考えました。そこで、取り組んだのが、日本自動販売機オペレーター業界で初めてとなる間伐材の活用です。

紙カップの原料である紙を見つめ、そこに間伐材を含む国産材を活用するということは、日本の森林を健やかにするサイクルを構築する一助となります。そして、日本の森林を健やかにすることは、森林が本来もっている機能の1つである水源涵養機能を高めることになり、おいしいお飲み物をつくる上で欠かせない“おいしい水”を育むことにつながります。自然の恩恵を受けて成り立つ事業を営む企業の責務としても欠かせない取り組みです。

## 間伐材紙カップ+地域の間伐材のシートでラッピング=自動販売木®

日本では、戦後、造林された人工林が資源として利用可能な時期を迎える一方、木材価格の下落等の影響などにより森林の手入れが十分に行われず、国土保全など森林の多面的機能の低下が大いに懸念される事態となっています。このような厳しい状況を克服するためには、木を使うことにより、森を育て、林業の再生を図ることが急務となっています。国産材、国内の間伐材を活用することは、日本の温室効果ガス削減目標を達成するために必要とされる森林整備にもつながります。

そこで、アベックスでは、間伐材紙カップを使用したうえ、地域の間伐材で作ったシートによってラッピングしたカップ式自動販売機を「自動販売木®」と名付け、展開を始めました。



「公共建築物等における木材の利用の促進に関する法律(平成22年10月施行)」の施行以来、小学校や消防署でも木造化、木質化が進められていますが、国産材の活用の他、木の温もりがもつ効果に期待も寄せられており、アベックスの自動販売木®もご利用いただくお客様から「温もりがある」「木の温かさが感じられる」というありがたいお声を頂戴しています。

※自動販売木®はアベックスの登録商標です。



▲奈良県橿原総合庁舎(ご担当者様と自動販売木®)



▲徳島県庁



▲厚生労働省



間伐材を活用した紙カップ

## 森林の恵みをたっぷり受けている カップ式自動販売機

### カップ式自動販売機と森林





TOPIC

こどもたちへの木育を行っています。

これまでも環境に関する出前授業を行ってまいりましたが、2014年度は小学校から木育に関するご要望をいただき、各地で木育の出前授業を行いました。



▲宇都宮市立今泉小学校



▲滝川市立江戸乙小学校

TOPIC

「エコプロダクツ2014」に出展しました。

日本最大級の環境イベント「エコプロダクツ2014」の環境省ブースにおいて、気候変動キャンペーン「Fun to Share」の賛同企業として出展しました。



MEMO

日本の森林は、いま

日本は国土の約7割が森林。そのうち約4割が、人が手を入れてきた人工林です。人工林では、苗木を植える「植栽」に始まり、その後は、苗木の生長を妨げる雑草を伐り払う「下伐り」、成長過程で過密になった森林を適当な密度にするために抜き伐りを行う「間伐」などの作業が数十年にわたって実施され、ようやく健全な森林が育れます。

日本では、昭和40年代までは林業生産活動が盛んでしたが、社会や暮らしの変化に伴い、プラスチックや金属、そして外国からの輸入材の使用が増えたことにより、国産材供給量は、昭和42年

をピークに減少傾向をたどることになります。平成14年を底として、近年やや増加傾向にあるとはいえ、このままの低い水準で推移すると、日本の多くの人工林は手入れの行き届かない状態になる恐れがあると言われています。延いては、水を蓄える力が減り、土砂災害が増え、生物多様性が乏しい荒れた森林の増えることが危惧されているのです。

森林には実に多くの機能があり、私たちが受けている恩恵は計り知れないものがあります。森林本来のチカラを引き出すためにも、間伐等による森林の手入れ、そして間伐材の活用は重要です。

健全な森林を育むサイクル







## 特集②

持続可能な調達 ～生物多様性保全への取り組み～

「サスティナビリティ」は品質の1つの指標です。  
コーヒーの品質は、おいしね。

世界のコーヒー需要が、近年著しく伸びていると言われています。コーヒーの愛飲者が増えることは素晴らしいことですが、需要に生産体制が追いつかない状況だったとしたら、それは恐ろしいことです。需要に追いつこうとするばかりに、森林が違法に伐採されていたり、児童労働が日常的に行われていたり、貴重な生き物が絶滅危機に瀕していたら。そして、消費国では、そのようなことには無関心に「おいしい」「香りがいい」と評されて、コーヒーが飲まれていたとしたら……考えるだけでも恐ろしいことです。失われた森林や児童の学びの時間、貴重なのちはもう戻りません。今日だけではなく、明日もおいしいコーヒーを飲むためには、生産地や生産者、流通にも配慮したコーヒーを、まずは「選ぶ」ことが重要であるとアベックスは考えます。お客様に「おいしいコーヒー」を、自信をもっておすすめしたいからこそ、環境にも労働者にも配慮した農園で栽培されたコーヒー豆を選びたいという思いから、現地にも赴き、「おいしさ」だけではなく、「サスティナビリティ」という指標をもって選定しています。

### アベックスのサスティナブルコーヒーと、イパネマ農園

アベックスでは、2001年に「有機栽培生豆100% コロンビア」の展開を開始。また、2010年からはレインフォレスト・アライアンス認証農園豆の使用を開始し、現在、展開中の「ブラジル」は、同認証農園であるイパネマ農園で生産されたコーヒー豆を30%使用しています。



コーヒーができるまで

アベックスとも所縁の深い、ブラジルの「イパネマ農園」を例にご紹介いたします。



野生動物生息エリアが保護されているため、動物の姿を見ることが出来ます。



① 収穫



② 粗選別



③ 乾燥脱殻



⑥ 麻袋生豆



⑤ カップテスト



④ 選別

「イパネマ農園」では、コーヒーの果実を収穫後、「粗選別」「乾燥・脱殻」「選別」という工程を経て、カップテストが行われます。そして、生豆は麻袋に詰められ、輸出されます。

MEMO

### レインフォレスト・アライアンスとは

地球環境保全のために熱帯雨林を維持することを目的に設立された国際的な非営利環境保護団体です。本部は米国ニューヨーク。

サスティナブル・アグリカルチャー・ネットワーク(SAN)によって定められた、100項目に及ぶ社会的、環境的、経済的

基準に基づき、農園の認証を行っており、生物多様性及び労働者と地域共同体の権利と社会的境遇を守るために活動しています。レインフォレスト・アライアンスの基準を満たす農園や森林には、アメリカ、ヨーロッパ、アジアなどの企業や消費者に広く認知されつつある認証マークを使用する資格が与えられます。







TOPIC

## アペックスのコーヒー鑑定士

「コーヒー鑑定士(Classificador)」は、ブラジルのサントス商工会議所が認定する資格制度。コーヒー豆の買い付けや販売、輸出、相場感覚などの商業上の知識や、コーヒー豆の格付けをするための知識、ブレンド製造の技術を身につけた者が取得でき、現在、アペックスには1名のコーヒー鑑定士がいます。



「ブラジル滞在中、2000検体以上カップピングを行ったことが一番の自信になりました。」



▲コーヒー鑑定士の身分証明書

◀コーヒー鑑定士  
石原豊史さん  
(開発室)

TOPIC

## コーヒーインストラクターの育成

アペックスでは、コーヒーのプロとして、コーヒーのより専門的な商品知識を身に付けることにより、お客様と円滑なコミュニケーションを図ることを目的

に、全日本コーヒー商工組合連合会が認定しているコーヒーインストラクターの養成を、2014年度より奨励しています。

TOPIC

## M-one café Coffee System (エムワン カフェ コーヒーシステム)

「M-one café Coffee System(エムワン カフェ コーヒーシステム)」は、マシンとマシンに最適にマッチングするコーヒー豆の供給、レシピ、調理プログラム、メンテナンスの技術サポートまでをトータル

で提供するもので、カップ式自動販売機で培ったコーヒー豆の味と香りを引き立てる術を知る、アペックスならではのドリンクシステムです。

おいしい高品質なコーヒーをお届けするためには、コーヒー豆とマシン、そしてサポート体制は三位一体です。

### 【コーヒー豆】

アペックス独自の味覚基準、品質基準に則り、豆の選定からブレンド、ロースト、そして最適なレシピづくりを行っています。

### 【マシン】

常に安定した品質と味を確実に再現するために、独創的なアイデアと最新技術を搭載したマシンを開発しました。

### 【メンテナンス】

突然のマシントラブルにも迅速に対応。また、定期的な保守点検や味覚チェック等の品質管理を実施する等、充実したサービスを行っております。



魅せるコーヒーマシンで  
1杯ずつ「淹れたて」を演出

**レッドボディ&スケルトン**  
臨場感のあるスタイリッシュデザイン。

**ペーパードリップ&エスプレッソ**  
独自機構で本格レギュラーコーヒーとエスプレッソコーヒーが抽出可能。

**多彩なメニューに対応**  
オプションのミルククーラーを付ければ、カフェラテやカプチーノもボタン一つで抽出。



スリムなフォルムで  
本格コーヒーをもっと身近に

**レッドボディ&コンパクト**  
スペースの少ない場所でも設置可能。

**ペーパードリップ方式**  
1杯ずつ豆を挽き、ドリップする本格マシン。

**抽出がスピーディー**  
味を損なわずにクイック抽出を実現。



## 特集③

アペックスの自動販売機開発

環境に配慮したエコベンダーの展開を拡大中です。

アペックスは、専門オペレーターとしては唯一自社内に開発部門を有し、独自の自動販売機開発を続けています。人にとって都合よくても、地球にとって後ろめたさを感じる「便利」には賛同できません。お飲み物をお買い上げいただくお客様にとっても、自動販売機をオペレートするオペレーターにとっても使いやすく、そして、地球にとっても負荷の小さい自動販売機の開発を使命とし、今後も製造から廃棄・リサイクルに至るライフサイクル全般にわたる環境負荷低減に努めた、独自の自動販売機開発を続けてまいります。

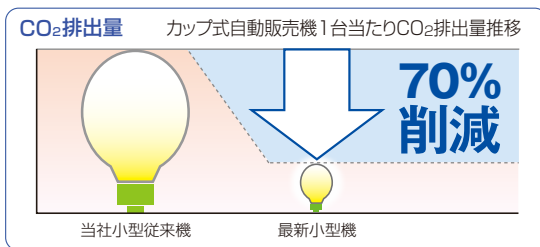
### 業界最省エネクラス カップ式自動販売機の開発

アペックスでは、グリーン購入法の基本方針に示される『判断の基準』に適合した機種種の開発に取り組んでいます。特に、最新の機種においては、これまでの環境配慮機能に加え、最新の機能を搭載した、業界最省エネクラスのカップ式自動販売機の実現させ、展開の拡大を図っています。

#### 特長

##### 大幅な年間消費電力量の削減

トップランナー基準値を大きく達成するとともに、CO<sub>2</sub>の大幅削減に貢献します。



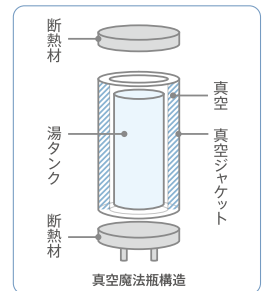
##### CO<sub>2</sub>冷媒を採用

冷却システムにノンフロン冷媒(CO<sub>2</sub>)を採用しました。ノンフロン冷媒だから、オゾン層破壊係数「0」、地球温暖化係数(GWP)「1」。地球温暖化防止にも、オゾン層保護にも貢献した、いま、最も環境に配慮した冷媒です。

##### 熱を逃がさない魔法瓶構造

タイガー魔法瓶株式会社の技術を応用して、共同開発した「真空断熱ジャケット」を湯タンクに搭載。

保温機能が格段に向上し、消費電力量の大幅削減を実現しました。



##### ピークシフト・ピークカット機能搭載

24時間内で任意の時間帯設定が可能ですので、ロケーションの状況に応じた組み合わせに対応できます。

##### スリープモード機能搭載

カップ式自動販売機は、食品衛生上、完全に全ての電力を断つことが難しいのですが、例えば、ご利用のない休日に、ほぼ完全停止に近い環境を作り出すことができる機能です。電照表示部の消灯および湯タンク運転・水槽運転・製氷運転の電力を最小限にして販売不可となり、設定した時間になると「販売中」に復帰する高効率なものです。

##### 蛍光灯レス

標準出荷時は、蛍光灯レス。人感センサー連動のLED照明導光板を、オプションで準備しています。



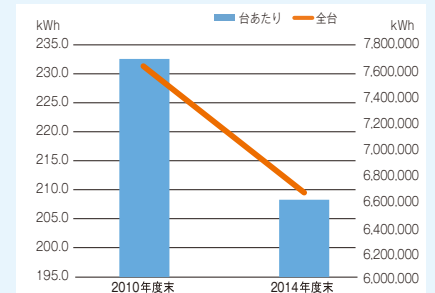
APEX 85QVR

### 省エネ自動販売機への入替効果(消費電力量)

アペックスでは、消費電力量の削減を図るため、既存の旧型の自動販売機から新型のものへの入替を推進しています。

省エネ機への入替を推進することにより、1台あたり消費電力量の削減を図り、延いては、アペックスの所有する全国の自動販売機全体の消費電力量引き下げを図ります。

省エネ自動販売機への入替効果(消費電力量)



※カップ式自動販売機を対象にしています。





TOPIC

## いざという時、頼りになるのもカップ式自動販売機ならではの。

東日本大震災発生から4年が経過し、阪神淡路大震災発生から20年という節目の年も迎え、また、異常気象が恒常化する昨今、日本全国で非常時に対する意識はますます高まりを見せています。

非常時は、飲料確保の手段に多様性を持たせることが非常に重要です。アベックスでは、東日本大震災の復興支援での経験を活かし、非常時に十分とはいえない自助・公助を補完する共助の1つの術として、災害対応型カップ自販機を提案しています。今後

の防災を見据えた対策として、業種業態を超えて関心は高く、地方自治体様や病院様、企業様等との「災害時における支援協定に関する協定書」締結が進んでいます。

自然災害の多かった2014年度、2ヶ所の協定締結先で災害対応型カップ自販機が稼働しました。また、協定書の締結先ではありませんでしたが、広島市の大規模土砂災害発生時にも災害対応型カップ自販機にて支援いたしました。

### 標準メニュー



### 災害時メニュー



災害時には、レギュラーコーヒーの商品ボタンが、「お水」と「お湯」ボタンに早変わり。お薬の服用や、乳児のミルクをつくるのにお役立ていただけます。紙カップは衛生面でも優れているうえ、乳児にミルクを飲ませるために飲み口を自在に変形できるのも特長の1つです。

### 山梨県上野原市役所

記録的な豪雪に見舞われた2014年2月、上野原市役所もみじホールが帰宅困難者及び住民の方々の避難所として開放されました。道路が寸断され、災害対応型カップ自販機の紙カップや原料の運搬は、文字通りのマンパワー。一人の人間が背負って運べる原料は、カップ式自動販売機ならではの長所です。



### 徳島県那賀町役場

記録的な豪雨に見舞われた2014年8月、那賀町役場が避難所として開放されました。主に帰宅困難者及び住民の方々の避難所として開放されました。



▲出入り口に置かれた協賛物資 (トイレトペーパー紙カップ)

### 広島県広島市立八木小学校・梅林小学校

2014年8月、日本海に停滞する前線に暖かく湿った空気が流れ込み、広島県広島市を中心に局地的な豪雨をもたらし、大規模な土砂災害が発生したため、広島市立の2つの小学校が住民の方々の避難所として開放されました。



▲広島市立八木小学校



▲広島市立梅林小学校

特集①

特集②

特集③

環境

CSR歩み



# アペックスの環境負荷

事業活動における環境影響

## 環境負荷低減のために

アペックスでは、バリューチェーン\*から発生する環境負荷の継続的な低減を図り、地球全体の収支バランスの調和がとれるよう資源を循環させるために、環境負荷を可能な限りライフサイクルでとらえることに努めています。

### [容器包装類]

#### 容器包装の循環・再資源化に向けて

アペックスでは、お客様のもとから回収した紙カップや缶・PETボトル等の空き容器のマテリアルリサイクル・サーマルリサイクルを実施しています。

### [レギュラーコーヒー残渣]

#### 食品残渣の循環に向けて

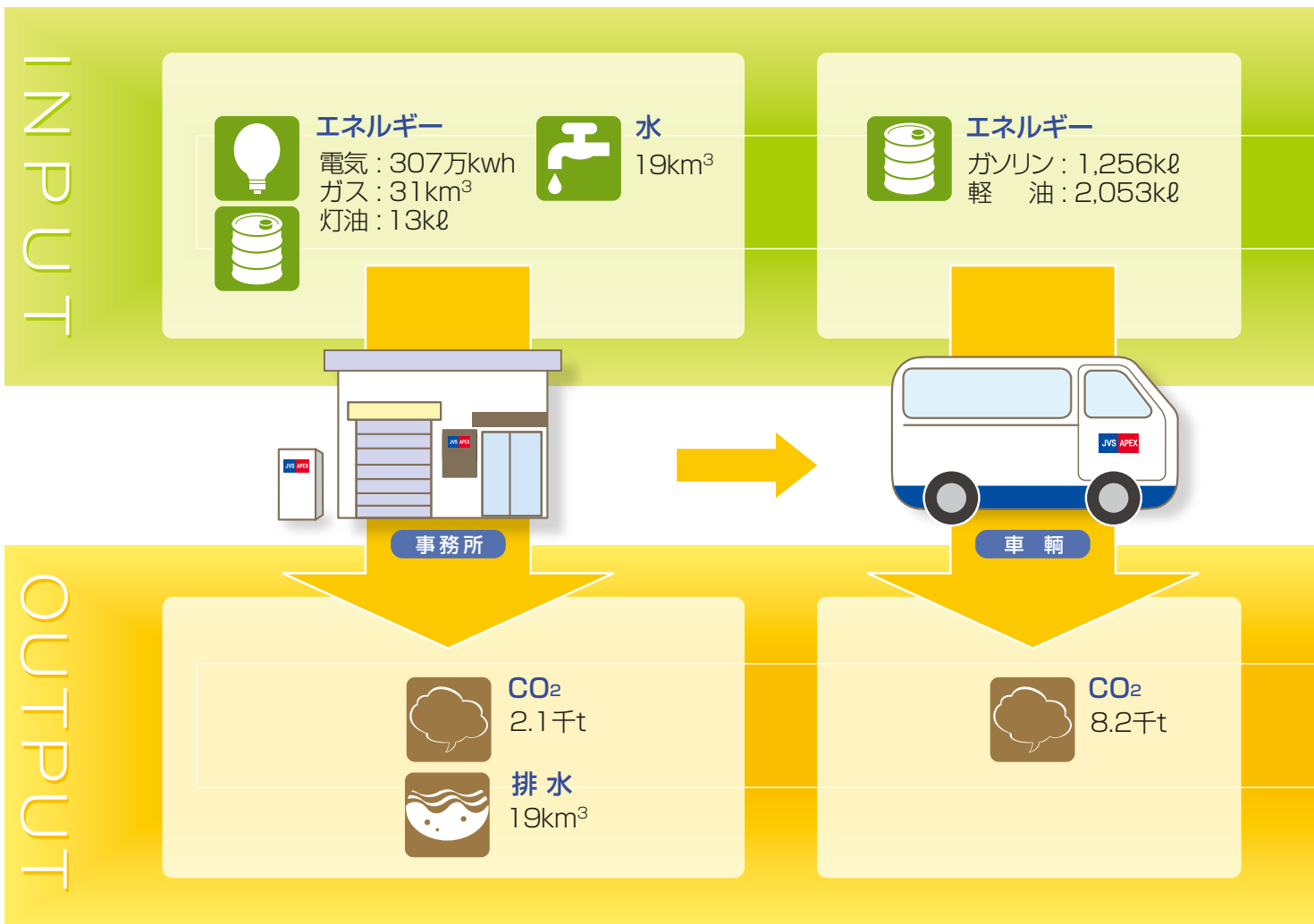
レギュラーコーヒー抽出にともない発生する残渣については、2008年度に中部エリアで肥料化リサイクルを開始。その後、順次リサイクルエリアを拡大し、肥料化の他に、炭化や熱回収も行っております。

### [エネルギー起源によるCO<sub>2</sub>排出量]

#### 地球温暖化の緩和に向けて

より消費電力量の小さい自動販売機の開発や、お客様への適正台数・適正配置の設置提案、また、旧型の自動販売機から新型のものへの入れ替え等により、自動販売機から排出されるCO<sub>2</sub>削減に取り組んでいます。また、業務全般にわたる改善にも積極的に取り組んでいます。

## 事業活動における環境負荷





**[紙カップやコーヒー豆の調達]**

**環境負荷をライフサイクルでとらえるために**

紙カップ原紙には合法木材を使用することはもちろん、国内の健全な森林育成のために、間伐材を含む国産材使用にこだわります。また、コーヒー豆の調達には、生物多様性の保全も視野に入れる等、エシカル調達※に配慮しています。



**バリューチェーン**

米ハーバード大学のマイケル・ポーター教授が、著書「競争優位の戦略」(1985年発表)の中で提唱した概念。

日本では、「(付加)価値連鎖」と表現されます。サプライチェーンが「モノ」の流れを意味するのに対し、バリューチェーンは商品やサービスの「価値」に着目しています。

**エシカル調達**

グリーン調達に加えて、環境問題や人権問題など様々な側面を調査した上で調達することをいいます。



特集①

特集②

特集③

環境

CSR歩み

# 循環型社会の構築のために

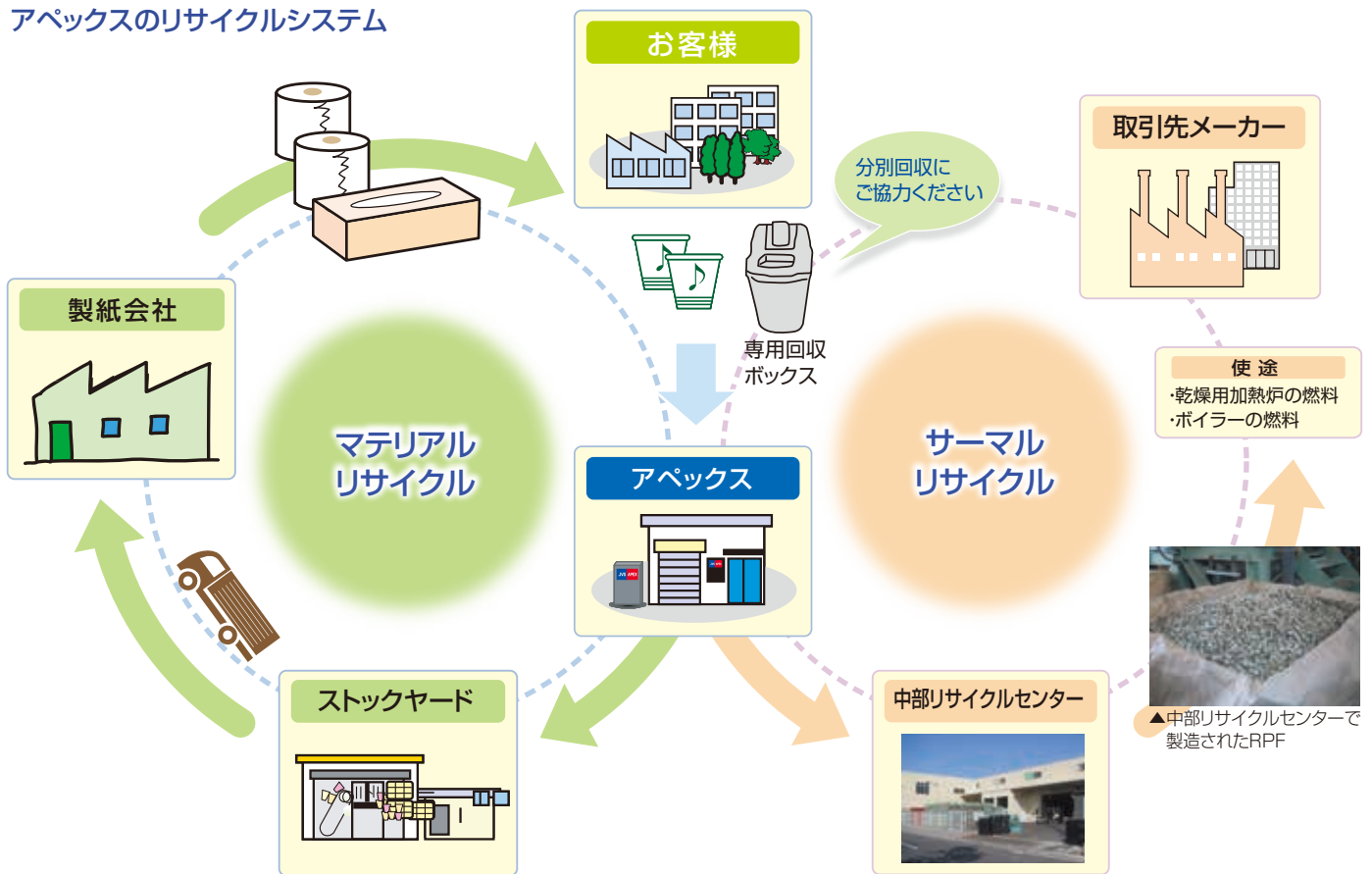
持続可能な社会を目指して

## 資源の循環利用

アベックスでは、廃棄物の削減・資源の循環を図るために、回収した紙カップの材料リサイクルを1998年から行っています。また、2001年からは「可燃廃棄物」をリサイクルの対象物としたサーマルリサイクルにも取り組んでいます。

容器包装類、プラスチック類の廃棄物を回収からリサイクルまで責任を持って一括管理することにより廃棄物の削減に努め、循環型社会構築に貢献しています。

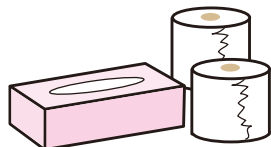
### アベックスのリサイクルシステム



MEMO

### 材料リサイクル

廃棄物を原料として再利用すること。同義語に「材料再生」「再資源化」等があります。具体的には、使用済み製品や生産工程から出るごみなどを回収し、利用しやすいように処理して、新しい製品の材料もしくは原料として使うことを指します。アベックスでは、使用済み紙カップを回収して衛生紙(トイレトペーパーやボックスティッシュ等)にリサイクルしています。



### サーマルリサイクル

廃棄物を単に焼却処理するだけでなく、焼却の際に発生するエネルギーを回収・利用すること。サーマルリサイクルには、油化、ガス化の他に、ごみ焼却熱利用、ごみ焼却発電、セメントキルン(焼成窯)原燃料化、廃棄物固形燃料(RPFやRDF)などがあります。アベックスでは、自動販売機を通して排出される可燃廃棄物をRPFにしています。

#### RPF(あーるぴーえふ)※

廃棄物固形燃料の1つ。アベックスでは、使用済み紙カップや紙パックなど、主に紙とプラスチックを破碎・圧縮して作っています。

※Refuse Paper&Plastic Fuelの略





## △ アペックスのマテリアルリサイクル

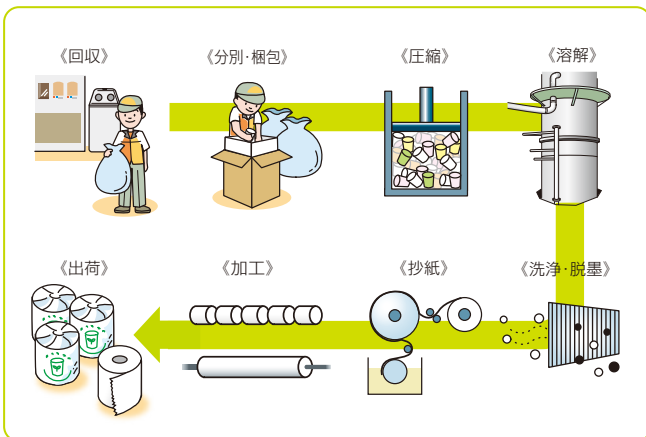
### 紙から紙へ

アペックスでは、廃棄物の削減、森林資源の保護、生物多様性の保全や、水資源・土壌の保護を地球環境問題の重要な課題であると考え、その取り組みの1つとして、紙資源の有効活用をしています。

アペックスでは、1997年、当時はリサイクルできないものの1つと言われていた紙カップのマテリアルリサイクルシステムを確立。翌年の1998年より、回収した紙カップを衛生紙(トイレットペーパーやボックスティッシュ等)へリサイクルしています。

#### 2014年度の実績

2014年度は、約80tの使用済み紙カップ等のマテリアルリサイクルを行いました。



## △ アペックスのサーマルリサイクル

### 紙・廃プラからエネルギーへ

2001年3月、自動販売機を通して排出されるすべての可燃廃棄物のリサイクルを目指し、愛知県大府市において「車輛搭載型固形燃料化設備」を保有し、中部地区の事業所から発生する可燃廃棄物の固形燃料(RPF)化を実施しました。そして、2004年10月に開設した[中部リサイクルセンター]では、産業廃棄物処分業許可を取得し、アペックスが運営する自動販売機を通して排出されるものもとより、社外から発生する廃プラ類をも受け入れ、固形燃料化し、廃棄物の削減に努めています。

製造したRPFは、検査機関に持ち込み、重金属や塩素等の項目について成分分析を行っています。

アペックスのRPFは、家庭系一般廃棄物から製造される生ゴミ・水分を主体としたRDFとは異なり、原料が安定しており、塩素や水分がほとんど含まれていないので、安心してご使用いただける固形燃料です。

#### 2014年度の実績

2014年度は、約1,345tの使用済み紙カップ等のサーマルリサイクル(余熱利用等含む)を行いました。

	アペックスのRPF	RDF
発熱量(cal/g)	6,000程度	4,000程度
塩素分(%)	0.2未満	2.0未満

※中部リサイクルセンターのRPF化ラインで製造されたRPFの成分と一般的なRDFを比較

## △ リサイクルの実績と今後の課題

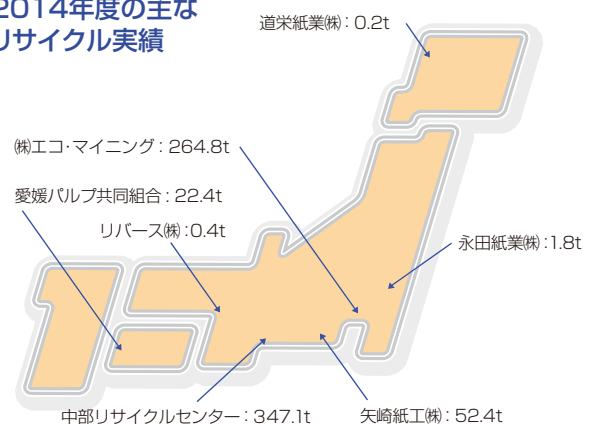
### 今後のリサイクル展開計画と課題

リサイクルを実施するうえで、運送効率をあげることは非常に重要な課題です。アペックスでは、まだ改善の余地があると考えており、今後も、新たな回収便ルートの確立や地元協力会社との提携等の検討を重ねることにより、輸送距離短縮や効率化による環境負荷低減を図り、リサイクルの効率化を目指します。

今後も、それぞれのリサイクルの特長を活かしつつ、より環境負荷の低いサーマルリサイクルを中心とした、紙カップリサイクルを推進していく予定です。



### 2014年度の主なリサイクル実績



# 循環型社会の構築のために

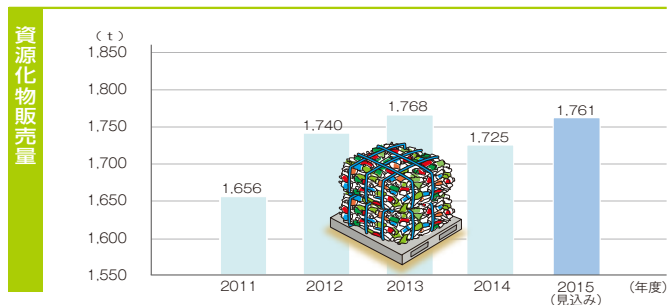
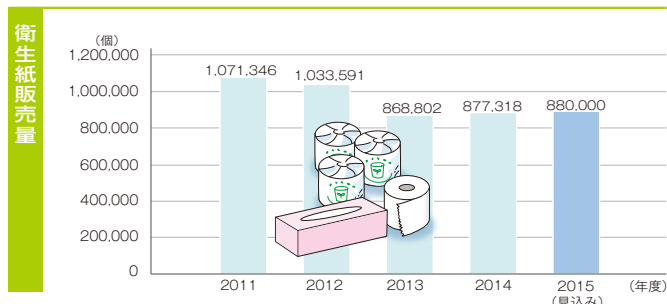
持続可能な会社を目指して

## 資源循環への取り組み

アペックスでは、循環型社会構築のために、回収した可燃廃棄物をリサイクルするだけでなく、自主的に拡大生産者責任を課し、リサイクル製品の販売を実施し、資源の循環に努めています。

### 衛生紙(トイレトペーパーやボックスティッシュ等)

学校や企業などの自動販売機設置先であるお客様にご利用いただいています。



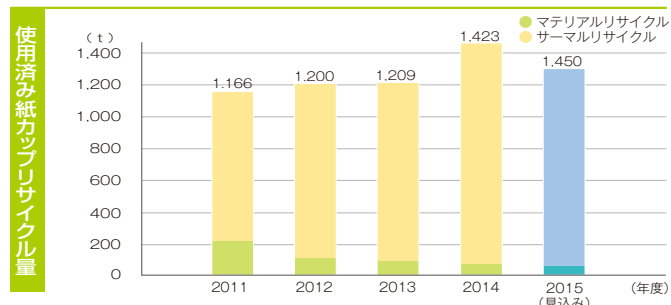
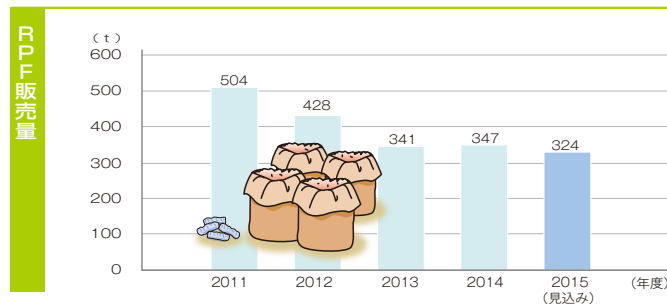
### RPF

石炭の代替燃料として使用されています。

※RPF1tは、石炭0.83tに相当します。

### 資源化物

種類毎にメーカーに販売し、再商品化されています。



## リサイクル工場見学会の開催

アペックスでは、弊社のリサイクルシステムをご確認いただくため、お客様のご要望に合わせて、富士市のストックヤード及び製紙工場、中部リサイクルセンター、日本バンダー整備株式会社等のご案内をしております。



▲中部リサイクルセンター



▲古紙ストックヤード

MEMO

### RPFについて

- 化石燃料の代替となりますので、資源枯渇防止に役立ちます。
- 化石燃料と同等の熱量があります。
- 灰分率は一般的に3～7%\*。石炭は11～15%程度なので、使用後の灰の埋立て処分量が削減できます。
- コンパクトな形状でハンドリング性に優れています。
- 歩留りが良いうえ、素材段階からリサイクル段階に要するエネルギーの小さい燃料です。

- 紙カップと廃プラの分別の必要がないため、作業効率にも優れます。
- 石炭(例 輸入一般炭)に対して、燃焼時に同一熱量回収を行う過程で石炭よりも約33%のCO<sub>2</sub>排出量削減\*になり、地球温暖化防止に貢献します。\*日本RPF工業会調べ





## レギュラーコーヒー残渣リサイクルへの取り組み

カップ式自動販売機のレギュラーコーヒーは、お客様からオーダーをいただくと(商品ボタン選択後)、その都度、コーヒー豆を挽き、ペーパーフィルターで濾しています。その後、コーヒー残渣は、自動販売機内で脱水し、減量化した状態で、機械内部に据え付けてある専用回収箱に捨てられます。

アペックスでは、このようなレギュラーコーヒー抽出後の残渣を、2008年度から、中部エリアで、肥料へとリサイクルする取り組みを始めました。専用回収箱から回収されたコーヒー残渣は、ペーパーフィルターを除去し、食品以外の異物がない状態にして、肥料製造元に出荷しています。アペックスのコーヒー残渣から生まれ変わった肥料は、製造元との契約農家やJAに販売され、ご利用いただい

ます。2012年度からは取り組みエリアを拡大し、関東エリアにおいては熱回収(一部、売電)をし、東北エリアにおいては肥料へとリサイクルしています。

一方、関西エリアにおいても、レギュラーコーヒー抽出後の残渣を、2010年度から炭へとリサイクルする取り組みを実施しています。

これらの取り組みは今後も継続して行い、リサイクル率を高めていく予定です。それにともない、残渣回収エリアの拡大、回収の効率化に努めるとともに、食品リサイクルを通して、食品残渣の再生利用化を図り、食品廃棄物の削減に今後も貢献してまいります。

## コーヒー残渣の流れ





アペックスでは、2004年10月、RPF(固形燃料)製造の拡大効率化と、缶・PETボトルの自社内リサイクルの体制を整えることを目的に、愛知県東海市に[中部リサイクルセンター]を開設しました。

同センターではRPF化ラインと資源化ラインの2つのラインを持ち、廃棄物の削減と循環型社会構築に貢献するため、飲料自動販売機を通して排出される、中部エリアにおける使用済みのすべての容器包装類(紙カップ、原料袋、缶、ビン、PETボトルなど)のリサイクルを自社で責任を持って行っています。



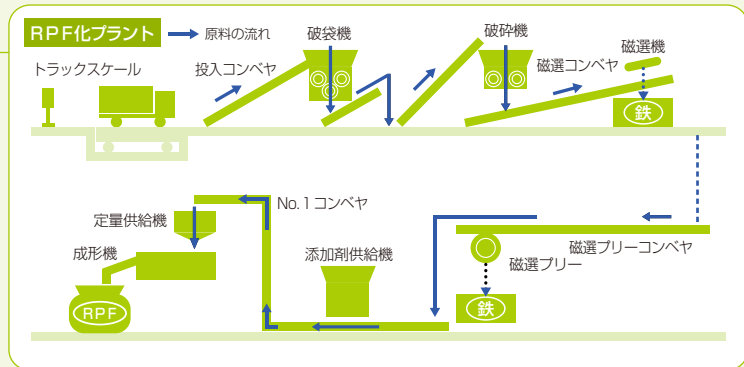
▲中部リサイクルセンター

▲ブロックにプレスされたPETボトル

## 固形燃料 (RPF) 化ライン

固形燃料化ラインでは、自社の自動販売機から排出される紙カップ、原料袋などの容器包装類、廃プラスチック類(社外から受け入れたものを含む)を、破碎・圧縮し、直径15mm・長さ50mm程度のクレヨン状に加工します。製造した固形燃料は、検査機関に持ち込み、高位発熱量、灰分、水分、硫黄、塩素の5項目について成分分析を行っています。

石炭の代替として、乾燥用加熱炉の燃料やボイラーの燃料として使用されます。



### [固形燃料化ライン]

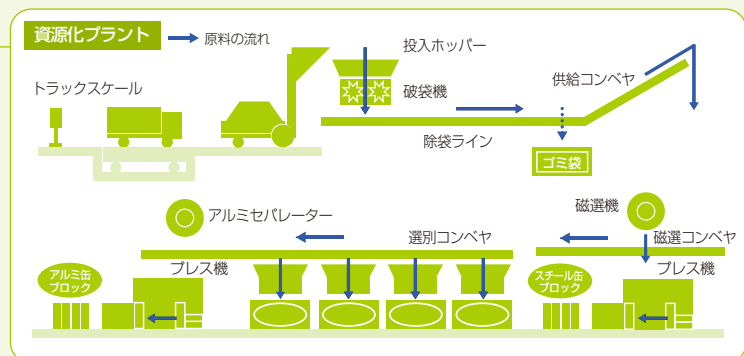
#### ■ 取り扱い品目

紙カップ・原料袋・紙パック・紙(複合紙)・  
廃プラスチック類等(※塩化ビニール不可)

#### ■ 処理能力: 3.6t/日

## 資源化ライン

資源化ラインでは、主に自動販売機を通して排出された、空きスチール缶・アルミ缶・PETボトル・ビンを選別し、スチール缶は35kg、アルミ缶は7kgのブロックにプレスします。また、PETボトルとビンは手作業で分別を行います。選別・圧縮された空容器は、各メーカーに出荷後、再商品化されます。



### [資源化ライン]

#### ■ 取り扱い品目

スチール缶・アルミ缶・PETボトル・ビン

#### ■ 処理能力: 12.0t/日

◀PETボトルのベラー機

#### ■ 処理能力: 4.0t/日





## 自動販売機の長寿命化

アペックスは、1966年、オペレーターとして初めて自動販売機の整備を開始。その後、整備部門は、1976年、日本ベンダー整備株式会社として独立しました。

アペックスでは、機械メーカーから購入し、お客様先に設置した自動販売機を、当社規程に基づき、日本ベンダー整備株式会社で計画的に整備を行っています。この計画的な整備の実施により、長寿命化を図り、省資源化、廃棄物の削減に努めています。



▲全国から整備のために集まった自動販売機

## 整備と環境負荷低減

日本ベンダー整備株式会社では、稼動時の故障や整備時の改良点等について、アペックスと情報の共有化を図りながら整備を実施しています。それらの情報は、次の新機種開発にも活用され、自動販売機の進化に大いに役立てられています。

また、単なる整備ではなく、デザイン変更や新機能搭載等、積極的な改造や修理等も行っています。そして、既存の自動販売機の内部で使用している保温材や断熱材からホース1本に至るまで、1点1点の部材の材質を見直すこと等により、どれぐらいの環境負荷低減を図ることができるのか検証を続けながら、さらなる環境負荷低減を実現させるべく取り組みを行っています。

2001年6月に開設したJVRリサイクルセンターでは、廃棄する自動販売機から、社内基準に基づいた再生可能部品の回収を行っています。回収した部品は、日本ベンダー整備株式会社で再生し、自動販売機の整備や修理に使用しています。



▲(整備)分解工程

### 2014年度実績

2014年度は、3,750台の自動販売機の整備を行いました。

## 円滑で継続的なISO 14001 活動のために

日本ベンダー整備株式会社は、開発室の原料加工センターとともに、2000年12月、ISO 14001を認証取得しました。自動販売機の整備工場と原料の加工センターという、オペレート業務とは異なる業務内容であることから、適用を受ける法令等もアペックスとは異なり、それぞれの厳



しい基準を順守するために独自の活動を行っています。

活動をパソコンで一元管理し、文書管理や活動の進捗管理をはじめ、順守評価や不適合是正報告の管理や有資格者の管理・教育に至るまで、誰もがいつでも確認できるシステムで運用管理しています。また、行政等への届出や許可証の有効期限が近づく警告が表示されたり、万一滞っている活動や報告がある場合にも警告で知らせ、注意を喚起します。

日本ベンダー整備株式会社では、この一元管理で、活動のクオリティの均一化を図りながら、今後も活動と管理の充実に努めてまいります。

# 環境マネジメントシステム

環境マネジメント活動

## アベックスの環境マネジメントシステム

### ISO 14001をグループで認証取得

アベックスでは、事業活動と環境活動を一体化し、継続的に進化させていく手法の1つとして、全事業所およびグループで、環境マネジメントシステムの国際規格ISO 14001を認証取得しています。

### 社内環境監査システム

アベックスでは、社内規定に基づき、毎年全サイトで社内環境監査を実施し、環境保全活動の妥当性を監視しています。

### 2014年度の監査実績

2014年度は、127拠点において、部門固有のテーマに沿って実施。その結果、[観察]として173件、[軽微な不適合]として42件、改善指摘事項が発見され、[重大な不適合]は発見されませんでした。指摘事項は、社内規程に基づき、速やかに是正処置に取り組み、各監査員が是正内容の確認を行いました。



▲社内環境監査(柏営業所)

## 環境リスクへの対応

アベックスでは、ISO 14001の手順に沿って環境影響評価を各現場で毎年行い、重点項目を特定し、環境リスクの未然防止と、発生時の環境影響の拡大防止に努めています。



### 2014年度の順守状況

2014年度、環境関連法規等、適用を受ける法令等に関する違反事項はありませんでした。



▲産廃処理委託業者の現地確認(千葉営業所)

▲産廃処理委託業者の現地確認(鹿児島営業所)

## 環境コミュニケーション

環境に関する情報の発信を通じた、ステークホルダーとのコミュニケーションを大切にしています。年に1度「サステナビリティレポート」を発行する他、Webサイト「環境への取り組み」では、環境保全への取り組みについて詳しい情報を紹介しており、定期的に情報を追加・更新することで、最新の情報提供に努めています。

### 環境関連の苦情・要望・問い合わせとその対策

2014年度、環境関連の要望・問い合わせは、環境保全活動に関する調査・協力依頼及び問い合わせ等が45件ありました。これらすべての依頼および問い合わせ事項について、速やかに対応いたしました。また、苦情はありませんでした。

## 社員への環境教育

アベックスでは、環境教育の重要性・必要性を重んじ、ISO 14001規格に則り、全事業所において、環境方針や環境目的・目標に関する教育や「理解度テスト」を実施しています。



▲新入社員研修



▲営業部セミナーにおける環境教育

対象	教育名
全社員	環境一般教育
新入社員	新入社員教育(環境教育有り)
車輛運転者	エコドライブ運転テクニック教育
力量業務従事者	環境特別教育
支社長・部署の長	管理者教育(環境教育有り)
内部環境監査員	内部環境監査員教育





## 環境計画の概要と評価

アベックスでは、持続可能な社会の実現を目指し、環境方針に基づき、継続的な環境保全活動を行っています。2014年度も、以下のような、具体的な環境目的・目標を設定し、達成するために取り組んでまいりました。

環境影響評価の結果、環境負荷が大きいため環境評価点の高い[車輻給油量削減]や[紙カップリサイクル率向上]については、環境指標と経営指標との向きを揃え、今後とも業務改善の一環として取り組んでまいります。

環境目的	2014年度環境目標	実績	評価*
地球温暖化緩和・資源枯渇防止・業務改善	【労働分配率改善・化石燃料の有効活用】(全部署) 1カップ(本)あたり給油量(原単位)削減:2012年度比1%削減	達成率:-480.0%	×
廃棄物削減・循環型社会構築	【紙カップリサイクル率向上】(事業統括本部) 年間紙カップリサイクル率:58.4%	達成率:117.6%	○
社会貢献	【一部署一役運動】(全部署で事務所周辺の清掃活動等を実施) 頻度:2.0回/月(80%の部署で達成)	達成率:109.4%	○
地球温暖化緩和・省エネ機の展開拡大	【自動販売機消費電力量削減】(業務管理部) 台当り消費電力量削減:2010年度比2%削減	達成率:430.0%	○
業務改善	【コスト削減】(環境部) 廃棄物処理代削減:2013年度比1,770千円	達成率:101.0%	○
環境対応型自動販売機開発	【環境対応型自動販売機の開発】(開発室) 進捗管理:100%	達成率:100.0%	○
業務改善	【自動販売機の効率的設置】(第3営業部) 複数台数設置件数:2013年度比20%向上	達成率:108.8%	○
地球温暖化緩和・資源枯渇防止	【省エネルギーの推進】(中部リサイクルセンター) 処理量当たりのCO <sub>2</sub> 排出量削減:2012年度比1%	達成率:226.0%	○
業務改善	【利益改善】(経営企画室 フード部門) 売上:予算達成	達成率:91.3%	×
業務改善	【車両事故件数の低減】(総務部) 年間車両事故件数削減:前年度比20%	達成率:99.0%	×
グリーン調達	【グリーン購入法特定調達物品の調達の推進】(総務部) グリーン品目数割合:総購入点数に対するグリーン品目数の割合各月84%の継続	達成率:102.6%	○

※評価について ○:達成 ×:未達成

## 環境コスト

### 環境保全活動に伴う全コスト

(百万円)

会計区分		費用	効果
サービス活動により生じるコスト	リサイクルコスト	71.9	211.5 <sup>※1</sup>
	廃棄物処理費	174.8	—
	その他環境整備費	72.2	—
管理活動におけるコスト	ISO維持費・教育費等	11.7	23.0 <sup>※2</sup>
社会活動におけるコスト	サステナビリティレポート作成等	2.1	—
合計		332.7	234.5

※1 再生品販売費(衛生紙、RPF、資源化物、その他)

※2 2000年(全社 ISO 14001 認証取得活動開始)と比較した光熱費・帳票代等の削減費用

# CSR活動・地域コミュニケーション活動

地域社会のために

## 気候変動キャンペーン「Fun to Share」への参加

アベックスでは、環境省が地球温暖化対策のために新たに立ち上げた気候変動キャンペーン「Fun to Share」に参加しています。低炭素社会実現に向けた取り組みの1つとして発足した「Share the Green」プロジェクトにも賛同し、北海道のバイオ

マスエネルギー活用プロジェクトに寄付し、年間10t-CO<sub>2</sub>の排出削減事業を支援します。



▲カーボン・オフセット証明書

## 一部署一役運動

アベックスでは、「私たちは、地域社会に貢献し信頼を集めます。」を行動宣言の一つに掲げ、地域社会との交流・社会貢献活動に力を注いでいます。

2014年度は、アベックスが経営する東京・有楽町のフレンチレストラン「アピシウス」において、2011年に復興支援を目的に開始した「チャリティカレー」を5月・10月に行った他、事務所周辺の定期清掃、市町村の社会福祉協議会へのリサイクルトイレットペーパーの寄託、環境セミナーにおけるパネルディスカッションへの参加や展示、小学生への木育、啓発活動等を行いました。また、香川営業所では、事務所照明の積極的なLED化を図り、消費電力量・CO<sub>2</sub>排出量の削減に取り組んでいます。

今後も、いま自分たちにできることは何なのかを見つめつつ、微力ながらもできる限り積極的な地域社会との交流、社会貢献を図ってまいります。

## 環境セミナーへの参加やお取引先への啓発活動を行いました。



▲全国自治体病院学会



▲国立病院学会



▲おおさかATCグリーンエコプラザでの環境セミナー



▲全国大学生協全国環境セミナー

被災地を支援するため、フレンチレストランでチャリティカレーを開催しました。



▲チャリティカレー



▲地域清掃への参加(東京本社)

## 営業所のLED化で消費電力量・CO<sub>2</sub>排出量の削減に貢献します。



▲香川営業所

## 環境保全活動の歩み

国内外の主な動き	年度	アベックスグループの動き
	1966年	・自動販売機の整備を開始
	1973年	・自動販売機の整備工場開設
	1976年	・自動販売機整備部門を「日本ベンダー整備株式会社」として独立
	1981年	・カップ式自動販売機「APEX 2400」発表
	1986年	・カップ式自動販売機「APEX 5000」発表
・「環境基本法」制定	1993年	・オフィス向けドリンクシステム「フラビア®S220」発表
・「JISQ14001」発効	1996年	・環境部を設立
・京都会議(COP3)開催(「京都議定書」採択)	1997年	・デポジット式紙カップ専用回収機「カップエコジット™」発表
・「家電リサイクル法」制定	1998年	・非木材紙カップの使用開始 ・使用済み紙カップのマテリアルリサイクル開始 ・カップ式自動販売機「APEX 120RV」発表 <small>※業界初・映像情報装置搭載</small>
・「PRTR法」制定	1999年	・ISO14001認証取得(東京本社・開発部・横浜南SC・厚木SC)
・「循環型社会形成推進基本法」等循環関係法6本成立	2000年	・グループ会社日本ベンダー整備株式会社にてISO14001認証取得
・環境省発足	2001年	・愛知県で移動式固形燃料化設備を導入 - サーマルリサイクルを開始 - ・カップ式自動販売機「APEX 120QV」発表 <small>※カップミキシング機構搭載、世界最速クイックベンダー</small> ・「有機栽培生豆100%使用コロンビア」発売開始 ・JVRリサイクルセンター設立 ・「環境報告書」発行開始
・「第2回地球サミット」開催(ヨハネスブルグ)	2002年	・「環境報告書」発行開始 ・「自動車リサイクル法」制定 ・「環境の保全のための意欲の増進及び環境教育の推進に関する法律」制定
・「JISQ14001:2004」発効	2003年	・「環境報告書」発行開始 ・「自動車リサイクル法」制定 ・「環境の保全のための意欲の増進及び環境教育の推進に関する法律」制定
・「京都議定書」発効	2004年	・「環境報告書」発行開始 ・「自動車リサイクル法」制定 ・「環境の保全のための意欲の増進及び環境教育の推進に関する法律」制定
	2005年	・「環境報告書」発行開始 ・「自動車リサイクル法」制定 ・「環境の保全のための意欲の増進及び環境教育の推進に関する法律」制定
・「電気用品安全法」経過措置期間終了	2006年	・「環境報告書」発行開始 ・「自動車リサイクル法」制定 ・「環境の保全のための意欲の増進及び環境教育の推進に関する法律」制定
・「改正容器包装リサイクル法」「改正フロン回収破壊法」	2007年	・「環境報告書」発行開始 ・「自動車リサイクル法」制定 ・「環境の保全のための意欲の増進及び環境教育の推進に関する法律」制定
・「改正食品リサイクル法」「改正電気用品安全法」施行	2007年	・「環境報告書」発行開始 ・「自動車リサイクル法」制定 ・「環境の保全のための意欲の増進及び環境教育の推進に関する法律」制定
・「第1回アジア・太平洋水サミット」開催	2007年	・「環境報告書」発行開始 ・「自動車リサイクル法」制定 ・「環境の保全のための意欲の増進及び環境教育の推進に関する法律」制定
・「京都議定書」第一約束期間開始	2008年	・「環境報告書」発行開始 ・「自動車リサイクル法」制定 ・「環境の保全のための意欲の増進及び環境教育の推進に関する法律」制定
・洞爺湖サミット開催	2008年	・「環境報告書」発行開始 ・「自動車リサイクル法」制定 ・「環境の保全のための意欲の増進及び環境教育の推進に関する法律」制定
・「生物多様性基本法」施行	2008年	・「環境報告書」発行開始 ・「自動車リサイクル法」制定 ・「環境の保全のための意欲の増進及び環境教育の推進に関する法律」制定
・「改正家電リサイクル法」施行	2008年	・「環境報告書」発行開始 ・「自動車リサイクル法」制定 ・「環境の保全のための意欲の増進及び環境教育の推進に関する法律」制定
・コペンハーゲン会議(COP15)開催	2009年	・「環境報告書」発行開始 ・「自動車リサイクル法」制定 ・「環境の保全のための意欲の増進及び環境教育の推進に関する法律」制定
・「改正省エネ法」施行	2010年	・「環境報告書」発行開始 ・「自動車リサイクル法」制定 ・「環境の保全のための意欲の増進及び環境教育の推進に関する法律」制定
・「改正温対法」施行	2010年	・「環境報告書」発行開始 ・「自動車リサイクル法」制定 ・「環境の保全のための意欲の増進及び環境教育の推進に関する法律」制定
・国連地球生きもの会議(COP10)開催 「名古屋議定書」「愛知ターゲット」採択	2010年	・「環境報告書」発行開始 ・「自動車リサイクル法」制定 ・「環境の保全のための意欲の増進及び環境教育の推進に関する法律」制定
・カンクン会議(COP16)開催	2010年	・「環境報告書」発行開始 ・「自動車リサイクル法」制定 ・「環境の保全のための意欲の増進及び環境教育の推進に関する法律」制定
・東日本大震災	2011年	・「環境報告書」発行開始 ・「自動車リサイクル法」制定 ・「環境の保全のための意欲の増進及び環境教育の推進に関する法律」制定
・ダーバン会議(COP17)開催	2011年	・「環境報告書」発行開始 ・「自動車リサイクル法」制定 ・「環境の保全のための意欲の増進及び環境教育の推進に関する法律」制定
・「公共建築物等における木材の利用の促進に関する法律」施行	2011年	・「環境報告書」発行開始 ・「自動車リサイクル法」制定 ・「環境の保全のための意欲の増進及び環境教育の推進に関する法律」制定
・国連持続可能な開発会議(リオ+20)開催	2012年	・「環境報告書」発行開始 ・「自動車リサイクル法」制定 ・「環境の保全のための意欲の増進及び環境教育の推進に関する法律」制定
・生物多様性条約第11回締約国会議(COP11)開催(ハイデルバート)	2012年	・「環境報告書」発行開始 ・「自動車リサイクル法」制定 ・「環境の保全のための意欲の増進及び環境教育の推進に関する法律」制定
・ドーハ会議(COP18)開催	2012年	・「環境報告書」発行開始 ・「自動車リサイクル法」制定 ・「環境の保全のための意欲の増進及び環境教育の推進に関する法律」制定
・「京都議定書」第二約束期間開始(日本は不参加)	2013年	・「環境報告書」発行開始 ・「自動車リサイクル法」制定 ・「環境の保全のための意欲の増進及び環境教育の推進に関する法律」制定
・「小型家電リサイクル法」施行	2013年	・「環境報告書」発行開始 ・「自動車リサイクル法」制定 ・「環境の保全のための意欲の増進及び環境教育の推進に関する法律」制定
・国連気候変動ワルシャワ会議(COP19)開催	2013年	・「環境報告書」発行開始 ・「自動車リサイクル法」制定 ・「環境の保全のための意欲の増進及び環境教育の推進に関する法律」制定
・水銀に関する水俣条約が採択される	2013年	・「環境報告書」発行開始 ・「自動車リサイクル法」制定 ・「環境の保全のための意欲の増進及び環境教育の推進に関する法律」制定
・「改正省エネ法」施行	2014年	・「環境報告書」発行開始 ・「自動車リサイクル法」制定 ・「環境の保全のための意欲の増進及び環境教育の推進に関する法律」制定
・「気候変動サミット2014」開催(米ニューヨーク)	2014年	・「環境報告書」発行開始 ・「自動車リサイクル法」制定 ・「環境の保全のための意欲の増進及び環境教育の推進に関する法律」制定
・生物多様性条約第12回締約国会議(COP12)開催(ピョンチャン)	2014年	・「環境報告書」発行開始 ・「自動車リサイクル法」制定 ・「環境の保全のための意欲の増進及び環境教育の推進に関する法律」制定
・国連気候変動リマ会議(COP20)開催	2014年	・「環境報告書」発行開始 ・「自動車リサイクル法」制定 ・「環境の保全のための意欲の増進及び環境教育の推進に関する法律」制定
・「フロン排出抑制法(改正フロン回収・破壊法)」施行	2015年	・「環境報告書」発行開始 ・「自動車リサイクル法」制定 ・「環境の保全のための意欲の増進及び環境教育の推進に関する法律」制定
	2015年	・「環境報告書」発行開始 ・「自動車リサイクル法」制定 ・「環境の保全のための意欲の増進及び環境教育の推進に関する法律」制定

特集①

特集②

特集③

環境

CSR  
歩み





アベックスグループ  
**Sustainability  
Report**  
2015

環境・社会報告書

サステナビリティレポート2015

お問い合わせ



アベックスグループは、環境マネジメントシステムの国際規格ISO14001:2004を認証取得し、環境保全活動に積極的に取り組んでいます。

<http://www.apex-co.co.jp>



国産間伐材10%以上配合紙

森林循環紙



K0301090



Printing. Naturally.



植物油インキを使用しています。